

「地図豆」の地図を広げて街歩き

6-1 ぐるっと伊能忠敬をたずねる（地下鉄でめぐる 距離約？km）



伊能忠敬肖像

伊能忠敬にかかる史跡などを地下鉄を乗り継いでたどる。

【道順】

00 東京メトロ三越前駅→01 伊能忠敬住居跡碑（東京メトロ門前仲町）→02 伊能忠敬像・三等三角点「富岡八幡宮」→03 高輪大木戸跡・几号水準点（都営地下鉄泉岳寺駅）→04 伊能忠敬遺功表（都営地下鉄芝公園駅）→05 伊能忠敬墓・高橋至時墓など（源空寺）（東京メトロ稲荷町駅）→06 司天台跡（浅草天文台跡）（東京メトロ蔵前駅）→07（間宮林蔵）榮域顕彰記念碑（本立院）（東京メトロ清澄白河駅）→08 伊能忠敬歩測の道

ルートマップ（無し）

【街歩き解説】

01 伊能忠敬住居跡碑（門前仲町1丁目）：ここは、伊能忠敬が江戸に出て最初に住まいしたところである。今は、歩道上に石柱が一本あるだけ。



伊能忠敬住居跡碑・伊能忠敬像と三等三角点「富岡八幡宮」

- 02 伊能忠敬像・三等三角点「富岡八幡宮」：富岡八幡宮は、伊能忠敬が全国測量の出立に先立ち、安全を祈願してお参りしたところ。忠敬の銅像が建てられ、その台座には三等三角点「富岡八幡宮」も設置された（2001年）、境内には、横倒しになった鳥居に几号水準点が刻まれている。
- 03 高輪大木戸跡：伊能忠敬の東海道筋の測量の基点となったのが、高輪大木戸。国道側に几号水準点がある。



高輪大木戸跡・伊能忠敬遺功表

- 04 伊能忠敬遺功表（芝公園）・几号水準点：忠敬（中啓：扇の一種）をもじって作られたという2枚の石板でできた碑は、東京地学協会が昭和40年（1965）に建立した。
- 05 伊能忠敬墓・高橋至時墓など（源空寺）：「大日本沿海実測全図」、いわゆる「伊能図」を作成した伊能忠敬の墓の隣には、師の高橋至時墓なども並んでいる。



伊能忠敬墓・司天台跡

- 06 司天台跡（浅草天文台跡）：江戸時代後期、幕府の天文・暦術・測量・地誌編纂・洋書翻訳など行ったところ。
- 07（間宮林蔵）榮域顕彰記念碑（本立院）：間宮海峡を発見し、当地の測量を行い、地図を作成した間宮林蔵を称える顕彰碑（鳩山一郎筆）がある。

08 伊能忠敬歩測の道：司天台から伊能忠敬住居跡までは、彼が通った歩測の道だ。

地図豆知識：伊能忠敬住居跡碑

伊能忠敬（いのうただたか 1745-1818）は、49歳にして家督を景敬に譲り隠居した。翌寛政7年5月（1795）には、江戸へ出て黒江町（現門前仲町）に最初の居を構え、やがて、幕府天文方の高橋至時の門に入った。その後、文化11年（1814）には、住まいを八丁堀亀島町（現日本橋茅場町）に移した。

黒江町の住居からは、蝦夷南岸・奥羽街道測量、伊豆沿岸・本州東海岸測量、奥羽西半分測量と連綿と続く日本各地への測量に旅立つことになる。

従って、江戸で生活する時間は少なく、九州測量に着手したころは、文化6年8月（1809）から同8年5月まで、あるいは同8年11月から同11年5月までという足掛け3、4年に及ぶ長期の不在もある。

忠敬は各地へ旅立つ以前、ここ黒江町で象限儀による天体観測をし、北緯35度40分30秒を得た。これは、後に陸地測量部が測定した値より、わずか23秒大きかっただけである。更に、磁針儀により富士山や筑波山を観測して原方位とした。従って、ここは住居跡としてより、天文測量と道線法を主体とした、忠敬の全国測量の出発原点として、さらに近代の日本地図（日本東半分沿海地図1804年上程）上で最初に零度の子午線を通した地点としての意味を持っている。

また、当時浅草にあった天文台（暦局 現台東区浅草橋3丁目19-26）との緯度差から子午線1度の距離を得たところでもある。

現在の旧住居付近は、下町特有のビルと町工場などが散在しているが、葛西橋通りに面した吉田印刷と浅井そろばん塾前の歩道に、伊能忠敬翁150年祭の行われた1968年に江東区教育委員会が建てた「伊能忠敬住居跡」の碑がある。ここに住まいしてから19年目の文化11年（1814）に九州測量から帰ると、住み慣れた黒江町から八丁堀亀島町に住居を移した。

亀島町の住居跡は、現在の日本橋茅場町2-13-11先の新大橋通り、国際ビルの南側あたりだといわれ、ここには、文政元年（1818）に没するまで住んでいた。この間、忠敬の各地での測量は足掛け17年、約3,700日に及んだ。

八丁堀亀島町に住まいしたころの忠敬は、さすがに高齢のため、この後の伊豆七島測量などには参加せず、弟子達を見送り、地図の整理をなどに精を出すことになる。

建物は没後も地図御用所として使用されたといい、文政4年7月久保木清淵ら測量所の吏員や忠敬の門弟らの協力で「大日本沿海実測全図」が完成し、高橋景保の序文を付して上程された。

地図豆知識：伊能忠敬墓

伊能忠敬は、文政元年（1818）73歳でこの世を去ったが、景保などの手で1821年に「大日本沿海実測全図」が上程されるまで、その死については伏せられていた。

遺体は遺言により、師である高橋至時の墓のそばに葬られた。墓は、源空寺の道を隔てた墓地にあり、墓地の中央すぐ左側に景保墓がある。さらに右隣には、「日本名山図絵」などで有名な南画家谷文晁(1763- 1840)と、なぜか幡随院長兵衛(1622- 1657)夫妻の錫杖を持った地藏菩薩の姿を彫った墓、そして至時墓、忠敬墓の順に並んでいる。

幡随院は、歌舞伎や芝居で有名な侠客。浅草で人入れ家業をしていたやくざ仲間の顔役で、旗本奴の首領と争って殺されたという。

墓石には佐藤一斎(1772-1859 儒学者)が記した、東河伊能先生之墓の銘と墓碑文が三面にわたって刻まれており、下総に生まれてからの忠敬の半生と数々の偉業について記されている。

至時と忠敬の墓が寄り添う様は、仕事を成し遂げた老弟子が、そのようにしてまで師に近づきたいという、師弟愛が感じられる一景であるが、師の墓に比べ忠敬の墓の方が堂々としているのは、墓碑を作った者が忠敬の気持ちをくみ取れなかったからだという人もいる。

なお、佐原の伊能家の菩提寺にも、忠敬の爪と髪が納められた墓がある。墓碑銘を書いた佐藤一斎は、若くして大阪へ出て懐徳堂塾に入るのだが、そのとき世話をしたのが間重富であったという。間重富との関係から、高橋景保、渋川景佑そして忠敬とも親しかった。

地図豆知識：司天台跡（浅草天文台跡）

浅草天文台は当時江戸にあった幕府の公設天文台の一つであり、司天台、また暦の作成・頒布を行っていたので暦局、頒暦御用役所、頒暦屋敷などとも称された。当時の天文台は暦を作るための天体観測を行う天文台で、造暦が終了すると天文台は廃止されるのが普通であった。造暦が終わっても残り、幕末まで設置されたのは浅草の天文台だけである。天明2年(1782)10月、牛込から浅草に移され、小高い築山の上に観測所が設けられた。

その場所は鳥越神社にほど近い、現在の台東区浅草橋3丁目にあたり、江戸通りと蔵前橋通りの交差点角には「浅草天文台跡」の表示板が立っている。ここには幕府の翻訳局も置かれ、当時の学術研究の中心として最新情報が入ってくる名物役所であったが、幕府の崩壊と共に明治2年(1869)4月に廃止された。天文台が廃止された後も、この付近は「天文が原」と呼ばれた。

地図豆知識：高輪大木戸跡

高輪大木戸は、徳川幕府が宝永7年(1710)に当時の東海道の左右に石塁を築いたのが始まりで、その後現在地に設置された。木戸は、治安の維持と交通規制の機能を持っており、お伊勢参りや京上りの旅人の送迎もここで行われた。

測量日記によれば、忠敬の送迎は北に向かったときは、千住宿や板橋宿、南は品川宿で行われた。送迎には佐原伊能家、同地頭そして住まいする黒江町や司天台の面々が大勢集まった。出発は、まず深川八幡宮への参詣から始まり、それぞれの宿で、酒肴で昼食をとり別れを告げるのが通例であった。

そうした一群の中に、時計師大野弥五郎・弥三郎父子もいた。彼らは、京都の時計師戸

田東三郎とともに、大阪の質屋の主人であり機器類の開発に天才的才能を発揮した間重富の指導を得て、忠敬が使用する象限儀、垂揺球儀などの測量機器の開発にあたった。

弥五郎・弥三郎父子が開発に関わった、象限儀は佐原市の伊能忠敬記念館に現存している。

ところで、忠敬の測量は三角測量に基づくものではないから基線というものはないが、東海道筋の測量に際して、便宜上ここを起点とした。このいきさつから東京地学協会建立の「伊能忠敬遺功表」も、当初はこの地が建設候補地であったという。

地下鉄三田線泉岳寺駅を下りてすぐにある大木戸跡の石垣は都の史跡に指定されており、几号水準点が刻まれている。

地図豆知識：伊能忠敬遺功表

この遺功表は、明治15年元老院議長佐野常民氏が、東京地学協会で行った「故伊能忠敬翁の事績」と題する講演の中での、「本会を以て太政官に具申して贈位恩賜を請い、なおかつ本会において有志者を募り、翁が像を鑄、もしくは碑を建て…」の言を出発点としたものである。

翌16年1月に東京地学協会会長北白川能久親王の名による上奏文提出により、同年2月に贈正四位の辞令が出された。そして、もう一つの提案については、同20年6月に渡辺洪基、大鳥圭介、大倉喜八郎、洪沢栄一らの名で都知事に建設を願い出て、当初は芝高輪大木戸に建設することを議決した。

明治22年(1889)12月、東京地学協会は、青銅製オベリスク型の立派な「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」を芝公園内に建立した。これは戦時中の金属回収政策によって昭和19年に取り壊された。

東京地学協会(会長細川護立)は、これを昭和40年(1965)に再建し、現在に至っている。碑は芝公園の最奥部にあり、2枚の花崗岩でできた碑面には、日本地図と忠敬を称える碑文が刻まれている。2枚の石板でできた碑の形は、忠敬(中啓：ちゅうけい＝扇の一種)をもじって作られたのだという。

近くには、田んぼの中に新幹線の岐阜羽島駅を誘致したことで知られる政治家大野伴睦の「鐘が鳴る 春あけぼのの 増上寺」の句碑や、東照宮の鳥居には几号水準点もある。

地図豆知識：間宮林蔵燕崇之墓

間宮林蔵(まみやりんぞう 1780-1844)は、天保15年(1844)深川冬木町で没した。後年は、勘定奉行遠山金四郎から内密御用を命じられたこともあるなど、幕府の隠密として日本各地を探索していた。

有名なシーボルト事件では、林蔵がシーボルトからの書簡を勘定奉行に提出したことで、高橋作左衛門景保とシーボルトの間で地図や書簡の交換が頻繁に行われているのではという疑問が起き、景保逮捕となったといわれる。

後にシーボルトは、林蔵が日本政府からの取り調べのきっかけを作った人物であることを知っていたにも関わらず、「樺太」が島であり、東韃靼との間に海峡があることを発見した地理学上の偉大な功績をあげた人として賞賛している。勿論、地図にも「間宮(1808)

瀬戸」と記入した。

遺骨は故郷の上柳村に葬られた。住まいがあった深川の本立院には、樺太探検に際して林蔵自らが建立した墓があり、歯のみが納められていたが戦災に会い毀損した。その後、1946年に間宮家に保存されていた拓本によって再建された。

詳しい説明は、墓碑右面にある。

裏面には榎本武揚書とあり、旧墓碑名が榎本の手によるものと推察される。場所は、本立院の先の平野 2 丁目交差点の北東角から二軒目の栃木屋と磯野クリーニング店の間で、少し分かりにくいところにある。

また、本立院には、1955年に瑩域顕彰記念碑が建てられ、表面の「間宮林蔵先生之瑩域」の文字は鳩山一郎の書である。

地下鉄「門前仲町」の駅からここまでの間には、忠敬の住居跡のほか、紀伊国屋文左衛門の住まいで明治期以降に岩崎弥太郎が造営した「清澄庭園」、実物大の江戸が再現された「江戸深川資料館」、「芭蕉記念館」などがあり深川めぐりには良いところである。

(いずれも自著「地図測量史跡を巡る」から)

+ * * * + オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu + * * * +